

ジュール・ラニョーにおける精神の〈自由〉
—「明証性と確実性についての講義」と「神についての講義」の補完性—

山 本 りりこ

要旨

本稿は、ジュール・ラニョー(1851-1894)の『名講義集』(*Célèbres leçons et fragments*)所収の「明証性と確実性についての講義」(以下、「明証性講義」と表記)と「神についての講義」(以下、「神講義」と表記)の二つの講義をとりあげながら、必然性と人間の精神の自由なはたらきがどのように描かれているのか、また、真なるものを前にした精神の自由はいかにして担保されるのかを明らかにすることを目的としている。これらの問いは、一見扱う領域が異なると思われる二つのテキストにおいて、精神の〈自由〉が共通する主題として存在していることを見出すことを可能にする。

「明証性講義」においては、明証性と確実性の関係を論じることを通して、精神が対象を前にしたとき、それが「必然的」であるかを肯定ないしは否定する精神の〈自由〉のはたらきが論じられている。講義冒頭で問われる「確実性は明証性から由来するのか」という問いも、「明証性の領域よりも確実性の領域のほうが広い」として確実性のほうを重視する主張も、精神の〈自由〉を強調するためのものだと考えられる。そのことは、「真理の徴」としての明証性を「明証的である」「必然である」と肯定するのが精神の自由のはたらきである確実性であるとされる点、またその確実性こそが真理の必然性の判断にかかわる、とされている点からも看取できる。

「神講義」は、「明証性講義」では語られなかった、精神の自由な行為がどのような行為において実践されうるのか、を具体的に示す講義であると考えられる。本稿では、「人間は完全性を愛する」とする箇所をとりあげた後、その〈愛〉の対象がすでに完成された完全性ではないとされていることに着目した。人間は本性的に完全性を求めると定義する一方で、われわれの〈愛〉の対象が完全性の潜勢力を秘めた不完全なものである点にラニョーは精神の〈自由〉を見出している。カントの実践理性の要請としての神を、われわれの精神に対して強制力を持って迫る、ある種の暴力性を有したものと捉えて批判する点からも明らかであるように、ラニョーは精神が能動的にはたらき、自由に肯定ないし否定できることを重視していたのである。

二つの講義は精神の〈自由〉を語る点で共通しているのだが、さらに両テキストの親和性が強く表れている箇所として、「神講義」においてラニョーが「あるべきもの」を「かくあるべし」と肯定する精神のはたらきを重視している箇所を指摘する。ここで示される「あるべきものを肯定する能力」こそが、「明証性講義」でいうところの「明証を明証として認識する」自由の同意であるからだ。

ラニョーは「明証性講義」において、一方では明証性は確かにわれわれの精神に説得力をもって迫ってくると認めながらも、他方では、明証的なものが精神の決定にとって強制的であることを否定する。精神を決定に至らしめる諸理由は、絶対的な強制力を有するものが理由になると、暴力的な諸必然性になってしまうためである。「神講義」でも、人間は完全性を愛すると規定しながらも、完成された完全性を有するもののみを愛の対象とするのではない、と精神の〈自由〉を主張する。完成された完全性を有するものは、「愛すべきもの」として規定されるため、必然的に強制力を持つこととなる。しかし、規定されたものを引き受けることしか許されないような受動的なありかたに、われわれの精神の〈自由〉は担保され得ないのだ。

以上の点から、「明証性講義」と「神講義」は精神の〈自由〉という共通の主題を扱っているテキストであるのみならず、その主題の議論の展開にも共通点が少なからず認められると指摘できる。このことから、ラニョーの思想において精神の〈自由〉が最も重視されたもののひとつであること、そして二つの講義が相互補完的な関係にあることを結論づけた。